

# ハワイ日系移民「元年者」出国 に関する一考察

染 井 直 人

## 1 はじめに

1868年5月17日、横浜からハワイに向け日本最初の集団移民が出国した。この年が明治元年であることから、後に「元年者」と呼ばれる一団である。ハワイに移り住んだ「元年者」は多くの労苦を重ねることになる。その後、ハワイとアメリカとの関係も変化するなかで、官約移民、私約移民、自由移民などとして、日本からハワイへ移民する人びとは増え、第二次世界大戦後には、政治、経済、司法、教育など要職に就く日系人も多く、第8代ハワイ州知事デービッド・ユタカ・イゲ（David Yutaka Ige）も誕生する。このような日系人社会の発展の第一歩を記したのが「元年者」であったともいえる。

少なくとも、ハワイ日系人社会において、「元年者」をそのように位置づけようとする動きは顕著である。「元年者」の出国から150年にあたる2018年6月7日、シェラトン・ワイキキホテルで、式典とシンポジウム“GANNENMONO CELEBRATING 150 YEARS”が開催された。そして、翌年2019年のホノルルフェスティバル25周年までの一年ほどの間に様々な行事が催された。ハワイ日系人連合協会は各島から日系人協会の代表者を集め、各島代表者会議を開き<sup>1)</sup>、「元年者」を日系ハワイ移民の始まりとし、以来、先人が積み重ねてきたハワイ日系人社会の歴史を、現代の日系人が認識し、「感謝の念」を持つための祝賀事業とした<sup>2)</sup>。

日系移民ハワイ移住150周年式典及びシンポジウムにおいて、秋篠宮は

「元年者」にとっては言葉や生活習慣、そして文化が全く異なるハワイでの厳しい生活と苦労の中でも約50人の人々がその後もこの地に留まりました」と「元年者」の事跡に触れるとともに、官約移民として1885年に再開された移民について次のように述べる。

厳しい労働条件のもとで懸命に作業に取り組む姿勢は、日本語の「頑張る」という精神に駆り立てられていました。ハワイへの歴史を振り返ると、一世や二世の人たちが様々な困難を克服しながら、ハワイの発展に大きく貢献を果たしてきたことが、ハワイという繁栄したコミュニティの創造と発展に大きく寄与してきたことは誠に誇るべきことでありましょう<sup>3)</sup>。

また、公益財団法人海外日系人協会<sup>4)</sup>は、毎年日本で開催している「海外日系人大会」を、日本人の海外移住150周年を記念し、ホノルルで開催した。そのテーマは「世界の日系人レガシーを未来に！ーハワイ元年者150周年を祝ってー」であった。そして世界各国地域（15か国18地域）で活躍する日系人が、「日系人の社会活動と課題への取り組み」と題するパネルディスカッション等を行った<sup>5)</sup>。

このように日本からの最初の移民として位置づけられることが多くなった「元年者」であるが、ハワイ日系移民の記念式典において、「元年者」を移民のはじめとしたのは、「ハワイ日系移民100年」に当たる1968年からである<sup>6)</sup>。1935年に開催された五十年祭、1960年に開催された七十五年祭は、1885年の「官約移民」を基準としている。1968年に開催された「ハワイ日系移民100年」においては、日本が明治元年を日本の近代化のはじめとし、「明治百年祝賀事業」を進めたこともあり、「元年者」にスポットがあてられた。しかし、ハワイ日系人連合協会と日本政府の見ていた「ハワイ日系移民100周年」は同じものではなかった。日本が明治百年を機に、日本の近代化と工業化を強く世界にアピールすることを目的に、ハワイ日系移民100周年をその一部と認識し、事業に取り入れようとしたことに対し、ハワイ日系人社会は先駆者及び先輩諸氏に感謝の意を表し、また苦労をしのぶことを

目的とした。このことはハサン（2017）に詳しい<sup>7)</sup>。

このようにハワイ移民史において重要視されるようになり、日系人社会の礎を築いたとされるようになった「元年者」とは、実際にはどのような者たちであったのだろうか。「元年者」として渡った日本人のなかには、日本に帰った者も少なからずいるが、彼らをハワイへと向かわせた動機や要因は何であったのだろうか。本研究では上野景範の残した「上野布哇国渡航日記」、三条家文書『日米和親条約』などの文書及びハワイにおける日本語新聞『布哇報知』などから、「元年者」と呼ばれるようになる移住者がハワイに何を求めたのか、そして何が「元年者」にハワイへ渡ることを決心させたのかを考察する。

## 2 「元年者」出国の時代背景

「元年者」が横浜を出港した頃の日本は、徳川幕府から明治新政府への移行期であった。1853年、ペリー率いるアメリカ合衆国東インド艦隊所属の黒船4隻が浦賀沖に現れ、その軍事力を背景に徳川幕府に開港をせまった。1854年に締結された日米和親条約をはじめとするオランダ、ロシア、イギリス、フランス等と締結された条約は、条約締結国の逗留者に対しての国法順守義務が欠落し、領事裁判権の規定や日本側の関税自主権の否定など、一方的に最恵国待遇を与える片務的な不平等条約であった<sup>8)</sup>。1867年11月9日、徳川幕府から大政奉還上表が提出され、1868年1月3日の王政復古大号令のもと1月11日には新政府が発足した。

一方、ハワイにおいては決定的な労働力不足が発生していた。1778年、キャプテン・クックにより発見され始まった西洋文明との接触によって、ともに持ち込まれた様々な病原菌に曝されると、これらの病原菌に抵抗力を持たないハワイの原住民たちは麻疹のような病気でも命を落とした<sup>9)</sup>。その後、鯨油目的の捕鯨産業が北太平洋を中心に盛んになったことで、ホノルルやラハイナが捕鯨基地として栄えた。長い航海をした捕鯨船員はハワイで惜しみなく金を落としハワイ経済を潤したが、捕鯨船から逃亡する者も多く、かわ

りにハワイ人を船員として雇い入れたため、ハワイ人の人口のうち 30 歳から 50 歳の働き盛りの男性の約 5 分の 1 がハワイからいなくなるという事態も見られた<sup>10)</sup>。

1861 年にアメリカで始まった南北戦争は、ハワイにとって大きな転換期となった。それまでアメリカにおける製糖産業はアメリカ南部で展開されていたが<sup>11)</sup>、南北戦争により南部が戦場となったことで砂糖の生産が減り、流通量が不足するに至った。野生の砂糖黍の群生地であったオアフ島コアラで 1835 年に始まったハワイの砂糖黍栽培は、その気候が育成に適していることから各地の借地で欧米人によるプランテーション栽培が進められ、アメリカにおけるハワイ産砂糖の需要が増大していった。製糖産業は、砂糖黍栽培から製糖作業に至るまで大量の労働力を必要とした。前述のとおり、西洋から文明とともに持ち込まれた病原菌による病死や、捕鯨船員の逃亡による代替えとしてのハワイ人の採用など、ハワイ人の急激な労働人口の減少によりハワイの原住民を製糖産業の労働力にあてていたハワイ政府は決定的な労働力不足に陥り、それを海外からの移民を受け入れることで補う政策をとった<sup>12)</sup>。

最初に労働力として受け入れたのは中国からであった。しかし、中国人は排他的で社会になじまず、労働者として適さないとハワイ政府や砂糖黍耕主から判断された<sup>13)</sup>。次にハワイ政府が労働力を求めたのが日本であった。当時の東アジアはイギリスをはじめオランダやスペインといった列強の植民地政策のもとにあり、これらの植民地から移民を受け入れることは宗主国とのかかわりあいも考慮しなければならず、簡単には進まなかったことは容易に察することができる。東アジアの国の中で植民地化されておらず独立を保ち、欧米のいずれの勢力下にもなかった日本はハワイ政府にとって好都合な労働力の供給地であった。

製糖産業にかかわる安価で大量の労働力の確保は、ハワイ政府にとって急務であった。このような中で、ハワイ政府外相ロバート・C・ワイリー (Robert C. Willey) から総領事として任命され、全権を委ねられた貿易商人であるユージン・ヴァン・リード (Eugene Miller Van Reed) によって「元年者」は募られた。

松永 (1966) は、リードの徳川幕府との旅券申請の様子を次のように述

べている。

リードは徳川幕府から 1868 年 4 月 2 日、300 人分の往来手形（以下「旅券」という）の交付を受け、さらに 4 月 24 日に 50 人分、合計 350 人分の旅券を交付されていた。しかし、180 人乗りのサイオート号しか備船手配ができなかったため、旅券を返却し新たに 180 人分の旅券の交付を受けたのが 5 月 4 日だった。5 月 9 日には徳川幕府の神奈川奉行所が明治新政府に接收され、これに替わる新たな組織として横浜裁判所設置の準備が始まった。この時点で 180 人の労働者が確保できていれば、リードはサイオート号を横浜から出航させていた<sup>14)</sup>。

リードは、裁判所判事を務めていた旧知の寺島陶蔵から政権交代の説明を受けた。この段階でまだ十分労働者を集められていなかったため神奈川奉行所から交付されていた旅券をいったん横浜裁判所に返却し、新たに明治新政府から旅券の交付を受けようとした。リードの思いにかかわらず旅券はなかなか交付されなかった。

リードは数度にわたり書面で旅券の早期の交付を求めたが、旅券は交付しないとの通告を明治新政府から受けた。リードは革命によって実権が移っても旧政府との約束事は新政府が引き継ぐのが国際法の慣習であると主張し、強く旅券の交付を求めたが、明治新政府がこれを無視し旅券の交付をしなかったため、最後通告の後旅券の交付を受けないまま 5 月 17 日に横浜港を出帆し、日本からの最初の海外移民である「元年者」はハワイへ向かった<sup>15)</sup>。

### 3 「元年者」の月額賃金 4 ドルについての考察

#### (1) 「元年者」の契約内容

リードは日本における移民の募集を周旋斡旋人木村正平に依頼した。木村正平は配下の口入れ屋で木賃宿太田屋半兵衛を頭とし、亀屋桑八、桑名屋米吉 3 名に「天竺へ行って素晴らしい仕事がある」と触れまわらせ、ハワイ

への移民を募集させた<sup>16)</sup>。約 400 人の応募があったが、身体検査の結果合格者は足りず、繰り返しの募集となった<sup>17)</sup>。「元年者」はハワイ渡航に際し、太田屋半兵衛との間でリードが作成した次のような六か条からなる取り決めを交わした。

- 一 労働契約期間は三か年にて、ホノルル到着の日より三十六か月を数ふ
- 一 賃金は一か月 4 ドル
- 一 全労働者の頭を一名設く
- 一 渡航船賃、来布後の住宅、食糧、治療費等は、凡て耕地会社より給与す
- 一 賃金支払方法、賃金は毎月一日、その半分を現金、半分を手形にて支払う。但し労働者が希望ならば、組長を通じて残余の半額を手形と引き換え現金で受け取ることを得。
- 一 三か年の労働契約が満期となった際未払いの金額は、横浜へ帰還の際にハワイ総領事が支払い、帰還者をその家庭へ送り届けるまでの世話をする<sup>18)</sup>。

上記の契約内容を見ると、まず賃金が月 4 ドル支払われる（この 4 ドルについては、後ほど考察する）。36 か月間で 144 ドルの賃金が支払われることになる。なお、支払いはメキシコ銀貨で行われた。また、往復の渡航費用も雇主負担で、日本に戻った際には家族のもとまで送り届けるとある。江戸から明治に移る過度期に続く内乱により経済が停滞し、一方で増え続ける人口過密と併せ当時の庶民は食料も仕事も満足になかった<sup>19)</sup>。そのような状況下、この契約内容はかなりの好待遇として当時の人々に映ったと考える。

しかし、この条件の中で、特に何が「元年者」を強くハワイへ誘ったのか、何が何も知らないハワイへの渡航を決心させたのだろうか。その問いを解くために、4 ドルという月額賃金に焦点をあて考察する。この賃金の持つ魅力と触れ込みの「天竺での仕事」という言葉が相まって、ハワイへの出稼ぎを決心させたと考えるからだ。そうでなければ、ハワイへの出稼ぎを決心する

ことはなかったのではないだろうか。そこで江戸時代末期に日本で暮らしていた庶民にとり、4ドルという月額賃金はどのような価値を持っていたのかを考察する。

## (2)「元年者」に支払われた賃金の根拠

リードは、当時の日本の特徴を治安が混乱し、不景気で不衛生な生活環境と分析した<sup>20)</sup>。リードが訪れたのは横浜を中心とした江戸近郊であった。ことに江戸や横浜の町民の生活は、表通りの大店、表店から一步裏店へ足を踏み入ると、共同井戸、共同便所の長屋暮らしで、建物は隣と板塀一枚で仕切られているという粗末なものであった。

このような生活は、衛生環境も健康状況も悪く、みじめな生活とリードの目に映ったと考えられる。リードは、1867年4月にハワイへ渡った中国に対する前例を参考に、自身の日本における調査結果から中国人と同様に年間約50ドルの賃金支払いが適当であると判断し、さらに三か年の年季明けに際し、日本に送り届ける義務を付することをハワイ政府に報告している<sup>21)</sup>。

## (3)「元年者」出国当時の経済背景—江戸時代の賃金と物価から—

日本国内では「元年者」にとっての月額賃金として支払われる4ドルがどのような価値を持っていたかについて考える。

当時の換金レートは、1ドル＝一兩と取り決められていた。1854年3月31日に日本とアメリカ合衆国が締結した日米和親条約第二条<sup>22)</sup>で、「亜米利加人へ相渡し候薪・水・食料欠乏之品代物として請取候彼国金銭位之儀、私共にては難相分候間、金銀錢を以て相弁じ候事」と定められた。最終合意の税則で交換比率が「同種同量の原則」に基づくとされた<sup>23)</sup>。これを受け洋銀1ドルと一分銀4枚分の銀の含有量が同等であること、一分銀は4枚で一兩であることから、洋銀1ドルは一兩と換算された<sup>24)</sup>。

江戸時代末期、特に慶応年間の庶民の賃金並びに物価は小野(2012)<sup>25)</sup>によると1868(慶応4、明治元)年、江戸の裏店住まいの人たちは、1か月一兩二分もあれば親子5人が心配なく暮らせ、寝酒の一合も飲めた。

このことから、江戸時代末期の人々には、「元年者」に与えられた4ドル



＝四両という月額賃金は破格に映ったことを推測することができる。ハワイへの渡航を決意するに十分な価値のあるものであった。

#### (4) ハワイでの4ドルという月額賃金の価値

4ドルという月額賃金が、江戸時代の日本においては破格であったことはわかった。それは、江戸における一両という通貨の経済的価値によるものであった。しかし、実際にハワイでの生活が始まると四両は4ドルであり、その4ドルの経済価値が低いこと、そこに「元年者」は自分たちの思い描いたことと現実の環境に大きな開きがあることに気が付く。提供された住居の粗末さについては、リードの日本における生活水準の分析結果とハワイの気候を考慮すれば粗末とも言えないだろう。しかし、支給される食糧にあっては、その内容と量が必ずしも労働者たちの生活を支えるに十分なものであったかどうかは疑問を残す。支給されたものが足りない、食習慣に合わないという場合、自費で支給された物に替わる物を購入し賄うこととなる。また、取り決めに含まれていない衣料品やその他の生活必需品も自弁しなければならない。しかし、ハワイは北太平洋のほぼ中央にある孤島であるため物産も少なく、大陸からの輸送費も価格に含まれるためいつも物価は高かった<sup>26)</sup>。

ハワイの物価は輸送費で左右されていたことについては触れた。そこで輸送費等が上積みされる前の物価はどのようなものであったのか、その物価の中で暮らす人々の収入はどのくらいであったのかを探ることで、輸送費等が上積みされたハワイの高い物価のなかで、「元年者」の得ていた4ドルという月額賃金がどのような価値を持っていたのかを明らかにすることができると考える。そのため、ここではアメリカ本土において物価や賃金について広く調査されているミズリー大学の資料“Price and Wages by Decade:1860-1869”から物価及び賃金を引用する<sup>27)</sup>。

まず、「元年者」に与えられた支給品が十分であったと仮定すると、自弁する必要があるものは衣料品である。アメリカ陸軍が支払った衣料品の価格を参考とする。

キャップ：66セント、靴下：1ドル、シャツ1ドル50セント



次に、このような物価の中で労働者が得ていた賃金について引用する。

1866 年	カリフォルニア州	農場労働者	2 ドル 50 セント
1868 年	ペンシルベニア州	鉱山労働者	2 ドル 50 セント
	コネチカット州	大工	2 ドル 25 セント

「元年者」と同じ単純労働者に対する賃金を引用した。しかし、ここで記された金額はいずれも日当である。

調理人 100 ドル、召使 35 ～ 70 ドル、メイド 40 ～ 70 ドル

これはカリフォルニアにおいて女性家事使用人に支払われた月額賃金である。これら引用した賃金からすると、「元年者」に与えられた月額賃金 4 ドルは、アメリカ社会においては単純労働者の日当 2 日分にも満たず、奴隷解放まで奴隷の仕事とされた召使やメイドなどの女性使用人の月額賃金ですら「元年者」の年収と同等であったことから、「元年者」の扱いが奴隷に等しいものであったことが窺われる。

以上の情報から、「元年者」に支払われた月額賃金 4 ドルではハワイの生活において必要な物資を必要なだけ揃えることは無理であったことがわかる。

## 4 ハワイにおける「元年者」に関する分析

### (1) 「元年者」ハワイ到着時の現地新聞から

最初に、リードがハワイに送った総領事通信を見る。

日本人は農夫として経験深く、あらゆる技能に堪能である。彼らは世界のいずれの人種よりも従順なるもので、ことに役人に対して最上の尊敬を払い、絶対にその命に服従する人間である。彼らはまた労働に興味を有することから、一度ハワイに慣れた後は、大いに満足し、契約期限を

終わって日本に帰ることを、かえって悲しむに至るであろう<sup>28)</sup>。

この当時の日本の社会について報告したものであるが、その判断に偽りがみられると考える。農民が士分である役人にはむかうことは許されることはなく、役人への敬意と服従は身分制度からくるものだからである。生麦事件の折に、事件発生前に島津久光の行列に遭遇したリードが下馬し、馬を道の端に寄せたうえで行列に道を譲り見送ったという事実<sup>29)</sup>からも、リードは当時の日本の風習に十分精通していたと判断することができる。そのようなリードが上記の内容の通信をしているということは、順調にゆかない移民の募集を、体裁良く取り繕った報告を送ろうとする商業的な意図が働いていると考えざるを得ない。

1868年6月19日、「元年者」を乗せたサイオト号は33日間の航海の後、ホノルルに入港し、翌6月20日に上陸した。上陸の6月20日と6月24日の現地新聞が報じている。

“*Hawaiian Gazette*” (6月24日号)<sup>30)</sup>

彼ら日本人は、一見すると人が好さそうで、元気旺盛のようである。(中略)。彼らは非常に丁寧な人種で、体裁が悪いにもこだわらず、少しも悪びれた様子が見えない。彼ら日本人は一般に好印象を与え、ハワイ人からも白人からも好意をもって迎えられ、将来ハワイにおいて温良かつ有能な労働者になるであろうと期待されていた。

“*THE PACIFIC Commercial Advertiser*” (6月20日号)<sup>31)</sup>

英国船サイオト号が日本人労働者を乗せ、横浜から33日かけて昨日入港した。労働者は行き届いた世話を受け、申し分のない健康状態で到着した。(中略)彼らは賃金について何ら決められていないにもかかわらず、快くハワイに来てくれた。

ハワイに着いた「元年者」が一先ずは好意をもって温かく受け入れられた様子を窺うことができる。しかし“*THE PACIFIC Commercial Advertiser*”紙の

ように、横浜で交わした取り決めに不確定事項とする内容を示すものも見られる。このような内容の認識はリードの移民募集前の日本の分析結果の報告の影響を受けているとも考えられ、のちの「元年者」の取り扱いにつながり、各耕地でのトラブルにつながったのではないかと考えられる。

また、「元年者」総代牧野富三郎がハワイ到着後の6月27日に横浜のリードへ宛てた報告書<sup>32)</sup>によると「当地は随分熱国にて（中略）霜も降らず（中略）住居よき処にて御座候<sup>33)</sup>」と休暇を満喫し、暑いが住みやすい所と喜んでいる様子を窺うことができる

## (2) 砂糖黍耕地での「元年者」

二週間の休養を満喫したあと各砂糖黍耕地へ配属<sup>34)</sup>され労働が開始されると、炎天下での肉体労働のうえ厳しい労働環境の中で、横浜で聞かされた話と違ふと不満が「元年者」の間に募り始めた<sup>35)</sup>。オアフ島コウラウ耕地では暑さのため2人の死者が発生し、マウイ島ウルパラクアでは過酷な労働に耐えられないと縊頸者を1人だしたほか、各地で小競り合いが発生した<sup>36)</sup>。「元年者」は砂糖黍耕地での労働者として募集されたにもかかわらず、実際には農業経験者がほとんどなく錦旗帰郷を夢見てハワイへ渡った町人たちであったため、酷暑の中での長時間の農作業に耐えられなかった。労働時間は朝6時から昼食休憩30分をはさんで夕方4時まで続き、少しでも手を止めるとルナと呼ばれる現場監督から鞭うたれる等過酷なものであった。また、病気にかかっても治療を受けられるどころかその申告は認められず、労働を休むことを許されることはなかった<sup>37)</sup>。

## 5 日本からの「元年者」救出と「元年者」のその後

「4ドル」という月額報酬にひかれ、よりよい生活が待っていると思ってハワイに移住したものの、目論見の外れた「元年者」のその後はどうなったのであろうか。

アメリカ合衆国では1865年3月の南北戦争の終結を受け、1865年6月、

奴隷解放宣言をした。南部における黒人奴隷制が廃止になったばかりであったその時期、ハワイの砂糖黍プランテーションにおける日本人労働者の待遇が、伝わる情報から奴隷に等しい待遇を受けていると判断され、アメリカ西海岸でも大きく取り上げられていた。そのようななか、1868年、商用でサンフランシスコに滞在中の宇和島藩士城山静一は、現地の新聞をとおして「元年者」の惨状を知り、日本人が奴隷に等しい扱いを受けているとの現地の新聞の和訳文とともに「皇朝横浜御政府様」あて嘆願書を提出した<sup>38)</sup>。また、「元年者」総代牧野富三郎からも1868年12月25、26日付、1869年7月10日付、同9月13日付で救出嘆願書が明治新政府あてに提出されている<sup>39)</sup>。これらの状況は日本においても一般の知るところとなり、西欧列強との国力差を埋めることに政策の重きを置いていた明治新政府も、対外関係上これ以上この問題を放置する事は各国との交渉にも悪影響を及ぼすと考え、上野景範の召喚特使派遣を決定した。

上野は1869年10月31日に横浜を出港し、サンフランシスコを経由して12月27日にホノルルに到着した。カメハメハ5世との謁見、ハリス外務大臣への訪問で、リードが日本の国法に背きハワイに連れてきた日本国民を帰朝させることが目的であると明らかにした<sup>40)</sup>。

上野は自身もオアフ島をめぐり調査した結果、一部の契約不履行も認められたが、「元年者」の置かれた状況は予想していたほど劣悪なものではなく、言葉が通じない環境、風習の相違による誤解、仕事への不慣れが不平・紛争のもとであったと結論付けた<sup>41)</sup>。そして、賃金の増額改善、就業条件の改善<sup>42)</sup>と病気時の手当てなどの条件の改正をハワイ政府に認めさせ、帰国を望む者の即時帰国も認めさせた。この交渉によって、月額4ドルであった賃金が15ドルから20ドルにアップされ、30ドルに及ぶ賃金を受けとる者もあった<sup>43)</sup>。また、労働条件の面でも、耕作地で労働中の「元年者」に対する監督の鞭打ち行為に対して、鞭打ちをした監督への過料徴収を定め、また、悪天候のなかでも行われていた耕地作業の悪天候時の休業、申し出ても認められていなかった被病時の休業と適切な手当の実施、「元年者」の身分を自由とすること、年季途中でも自費帰国の自由を認めること等の改善がなされた。

しかし、賃金や労働条件が改善されたことで、即時帰国を希望する「元年者」は 43 人しかおらず<sup>44)</sup>、残りの者たちはハワイに残る道を選んだ。ハワイに到着して 3 年の年季を終えた「元年者」は、半分はさらなる新天地を求め、賃金のより高いアメリカ本土に渡ったが、残りの半分はハワイに残り、続く日本人もなかったため現地の女性と結婚をすることとなる<sup>45)</sup>。

## 6 おわりに

本研究では日系移民ハワイ移住 150 周年にかかる記念式典等で、世界各地域で活躍する日系人社会の礎となったといわれている「元年者」について、各種文献から「元年者」がハワイへ移民として渡った動機は何であったのかを賃金という側面から再考した。そして、4 ドルという月額賃金が、移民としてハワイへ渡ることを決めた「元年者」の大きな動機であったことを「両」と「ドル」の通貨価値を比較することによって論証した。

「元年者」はリードによって横浜や江戸の近辺で募られた。本来、農業従事者として募集した移民であったが、実際に応募した者たちは町人で、農業経験者はほとんどいなかった。このような町人の集団が、農業を新天地で行うこと自体に魅力を感じて応募したとは考えられない。そこで、「元年者」応募に際して取り交わした契約内容の中の一つの項目である 4 ドルという月額賃金に対する経済価値に注目をした。江戸時代末、慶応年間の町人の賃金や高騰していた物価から考察しても、4 ドルという月額賃金の持つ経済価値は十分に魅力を持つ高い賃金であったことがわかった。

しかし、ハワイに渡った「元年者」の 4 ドルという月額賃金によって営む生活は、日本における四両の経済価値から夢見た生活とは程遠いものであった。ハワイにおいても四両は 4 ドルであったが、それは労働者の賃金としては非常に低いものであった。また、北太平洋のほぼ中央に位置し、産業自体が少なく製糖産業を中心としたハワイ経済は、物流の多くをアメリカをはじめとする諸外国からの輸入に頼っており、その価格には船賃などの運送費も加算されたので、物価は常に高かった。4 ドルという賃金の持つ経済

価値は、「元年者」が生活をするうえで、必要な日用品や衣類を買い揃えることができなかったことも明らかになった。

「元年者」に約束された4ドルという月額賃金がハワイではどの程度の価値であるかということを理解していたならば、果たして「元年者」はハワイへの渡航を決意しただろうか。

当時の日本は、江戸幕府から明治新政府への過度期であった。リードの日本分析のとおり、続く内乱で治安は混乱し、かさむ戦費で経済は停滞し、一方で増え続ける人口過密と併せ、当時の庶民は食料も仕事も満足になく、不景気で不衛生な生活状態であった。リードが訪れたのは横浜を中心とした江戸近郊であったが、ことに江戸や横浜において町民が生活していた裏店は粗末なものであった。

このような生活のなか、何とか状況から抜け出そうとした「元年者」は、4ドル＝四両という月額賃金につられたところが大きく、それを動機として一攫千金・錦旗帰郷という大きな夢を抱いて幕末の日本を飛び出した経済移民であったことを結論付けることができる。

ハワイに渡った「元年者」は、換金レートのからくりという現実直面し、目論見がはずれ、抱いていた夢は砕かれることになるが、そこからそれぞれの選択をすることになる。「元年者」の三分の一は召喚特使上野景範がハワイ政府と交渉した際に帰国し、約三分の一は三年の年季が明けたのち、さらに一攫千金・錦旗帰郷の夢を抱き続けてより賃金の高いアメリカ本土へ渡る。残りの三分の一は現地の女性と結婚するなど、ハワイに移民としての定着をすることを選ぶ。ハワイに残った「元年者」たちは限られているが、それでも日本からのハワイ移民のパイオニアとして、今後も調査を続けていきたい。

### 【参考文献】

- 足立聿宏（1977）『ハワイ日系人史 JAPANESE-AMERICAN IN HAWAII 日本とアメリカのはざまにありて』、葦の葉出版会
- 上野景範「上野布哇国渡航日記」『上野景範関係文書』36、民部省明治二年己巳九月三日付「爲御國人召喚以當官布哇島江使節被仰付候事」、国立国会図書館憲政資料室

- 牛島英彦（1977）『いこかメリケン、帰るかジャパン』、サイマル出版
- 王道フランク・篠遠和子（1985）『図説ハワイ日本人史 1885-1924』B.P. ビ  
ショップ博物館
- 小野武雄（2012）『江戸物価辞典』第2刷、展望社
- カイケンドール・ラルフ・（1943）、国友忠夫訳『ハワイ史』三省堂
- 金澤弘明（2006）「ハワイ王国の文化と社会—その変遷と多元化社会の形成」  
『文化継承学論集』（2）、明治学院大学、pp. 30 - 39.
- 川崎壽（2020）『ハワイ日本人移民史』、ハワイ移民資料館・仁保島村
- 今野俊彦・藤崎康夫編著（1986）『移民史Ⅲ』、新泉社
- 佐々木隆監修『資料に見る日本の近代化 開国から戦後政治までの軌跡』主  
要年表、国立国会図書館
- 三条家文書『日米和親条約』1854、国立国会図書館憲政資料室
- 島岡宏（1978）『ハワイ移民の歴史 新天地を求めた苦難の歴史』、国書刊  
行会
- ハサン・トパチョール「ハワイ「明治百年祭」イベント（1968年）と日系  
アメリカ人の記憶」“*Japanese Journal of Communication Studies*”46（1）、  
日本コミュニケーション学会、pp. 61 - 80.
- 松永秀夫（1966）「ハワイ移民「元年者」の横浜出帆」『海事史研究』7、  
日本海事史学会、pp. 98 - 110.
- 矢ヶ崎典隆（2000）「アメリカ合衆国アーカンザス川流域の甜菜糖産業」『歴  
史地理学』42 - 4（200）、歴史地理学会、pp. 1 - 22.
- 山下草園（1968）『「元年者」のおもかげーハワイ日本人移民百年祭記念ー』、  
日本ハワイ協会
- 山下草園（1943）『日本布哇交流史』、大東出版社
- 『布哇報知』1968.（01.01、02.03、02.16、03.26、03.28、04.03）、国立  
国会図書館新聞資料室

## 註

- 1）『布哇報知』1968.03.29、国立国会図書館新聞資料室、p. 6.
- 2）同 1968.01.01、国立国会図書館新聞資料室、p. 6.



- 3) 宮内庁ホームページ 2018.05.13『文仁親王同妃両殿下のアメリカ合衆国御訪問について』<https://www.kunaicho.go.jp/page/gaikoku/show/17> 2021.06.22 アクセス
- 4) 永住の目的をもって海外で生活している日本人並びにその子孫等日系人が母国で一堂に会し、居住国の実情を日本に知らせ、国際交流、国際理解、国際親善を深め、対日理解の促進を図ることを目的とする。
- 5) 『第 59 回回外日系人大会 in ハワイ実施報告書』、公益財団法人海外日系人協会
- 6) 『布哇報知』 1968.02.03、国立国会図書館新聞資料室、p. 5.
- 7) ハサン・トパチョール「ハワイ「明治百年祭」イベント（1968 年）と日系アメリカ人の記憶」“Japanese Journal of Communication Studies” 46（1）、日本コミュニケーション学会、pp. 61 - 80.
- 8) 佐々木隆監修『資料に見る日本の近代化 開国から戦後政治までの軌跡』主要年表、国立国会図書館
- 9) 足立圭宏（1977）『ハワイ日系人史 JAPANESE-AMERICAN IN HAWAII 日本とアメリカのはざまにありて』、葦の葉出版会、p. 10.
- 10) ラルフ・カイケンドール（1943）、国友忠夫訳『ハワイ史』三省堂、pp. 217 - 218.
- 11) 矢ヶ崎典隆（2000）「アメリカ合衆国アーカンザス川流域の甜菜糖産業」『歴史地理学』42-4（200）、歴史地理学会、pp. 1 - 22.
- 12) 金澤弘明（2006）「ハワイ王国の文化と社会—その変遷と多元化社会の形成」『文化継承学論集』(2)、明治学院大学、p. 35.
- 13) 島岡宏（1978）『ハワイ移民の歴史 新天地を求めた苦難の歴史』、国書刊行会、p. 223.
- 14) 松永秀夫（1966）「ハワイ移民「元年者」の横浜出帆」『海事史研究』7、日本海事史学会、p. 102.
- 15) 『布哇報知』 1968.02.29、国立国会図書館新聞資料室、p. 5.
- 16) 山下草園（1968）『「元年者」のおもかげ—ハワイ日本人移民百年祭記念—』p. 22.
- 17) 牛島英彦（1977）『いこかメリケン、帰ろかジャパン』、サイマル出版、p. 6.

- 18) 『布哇報知』 1968.04.03、国立国会図書館新聞資料室、p. 5.
- 19) 川崎壽 (2020) 『ハワイ日本人移民史』 布哇移民資料館・仁保島村、p. 34.
- 20) 前出山下草園 (1968)、p. 23.
- 21) 同上、pp. 22 - 25.
- 22) 三条家文書『日米和親条約』 1854、国立国会図書館憲政資料室
- 23) 『日米修好通商条約亜米利加国条約並税則』 第六条、1858、日本銀行金融研究所貨幣博物館所蔵
- 24) 『同種同量』 原則に基づき 1 ドルを一分銀 4 枚とした。そして、日本では金貨である一両が一分銀 4 枚とされていた。日本銀行金融研究所貨幣博物館展示資料によると、外国における金銀比価は 1 : 15 であったが、日本のそれは約 1 : 5 であった。つまり、海外では金貨としての一両は銀貨 15 枚と交換できるが、日本では 4 枚としか交換できなかった。4 ドルで得た一両金貨を外国に持ち出すことで約 4 倍の銀貨が得られるため、幕末には多くの金貨が海外流出した。これらの金銀比価の差と、アメリカと日本の国力の差がハワイと日本における 4 ドルの価値の差を生んだと考えることができる。
- 25) 小野武雄 (2012) 『江戸物価辞典』 第 2 刷、展望社、p. 216.
- 26) 『布哇報知』 1968.03.28、国立国会図書館新聞資料室、p. 5.
- 27) Libraries University Missouri “Price and Wages by Decade:1860-1869” <https://libraryguides.missouri.edu/pricesandwages/1860-1869>、2023.08.08. アクセス
- 28) 『布哇報知』 1968.03.26、国立国会図書館新聞資料室、p. 5. (前山北海訳文を引用)。
- 29) 『布哇報知』 1968.02.16、国立国会図書館新聞資料室、p. 5.
- 30) 前出足立聿宏 (1977)、p. 13. に引用されている。
- 31) 前出川崎壽 (2020)、p. 44. に引用されている。
- 32) 前出島岡宏 (1978)、p. 128.
- 33) 同上、p. 129.
- 34) 『布哇報知』 1968.03.21、国立国会図書館新聞資料室、p. 5.

- 35) 川崎壽（2020）『ハワイ日本人移民史』布哇移民資料館・仁保島村、p. 12.
- 36) 前出山下草園（1968）、p. 39.
- 37) 同上
- 38) ハワイ日本人移民史刊行委員会（1964）『ハワイ官約移住 75 年祭記念  
ハワイ日本人移民史』、布哇日系人連合協会、p. 58.
- 39) 前出今野・藤崎（1986）、p. 35.
- 40) 上野景範「上野布哇国渡航日記」『上野景範関係文書』36、民部省明治  
二年己巳九月三日付「爲御國人召喚以當官布哇島江使節被仰付候事」、  
国立国会図書館憲政資料室
- 41) 同上
- 42) 今野俊彦・藤崎康夫編著（1986）『移民史Ⅲ』、新泉社、p. 38.
- 43) 前出島岡（1978）、p. 203.
- 44) 前出上野文書
- 45) 王道フランクリン・篠遠和子（1985）『図説ハワイ日本人史 1885-  
1924』、B.P. ビショップ博物館、p. 16.